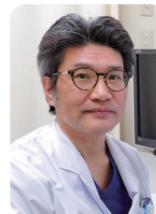


大腸がんの治療について

今回は外科部長の井口利仁医師に
「大腸がんの治療」について伺いました。



▲井口利仁 医師

病期（ステージ）です。大腸がんの場合は0～4期の5段階で評価され、数が大きいほど体内にがんが広がっていることを表します。

0期は粘膜にとどまる時期で転移は起こさないため、内視鏡治療が適応となります。粘膜より深く浸潤している1期や2期、がんに近いリンパ節に転移がある3期は手術が最適です。さらに、3

す。4期は遠くのリンパ節に転移していたり、肝臓や肺に転移をしていたり、がんがお腹の中に広がっているような進行した時期です。

24日号3ページで、当院の宮池医師が「大腸がん検診のすすめ」を掲載しました。そこで今回は「大腸がんの治療について」取り上げます。

大腸がんの主な治療法に、薬物治療と手術があります。がんの進み具合によって適した治療法を選択するのが

ですが、これを表すのが

切除しきれない場合には薬物治療の適応となりますが、出血や腸閉塞で困る場合には治療できないままでも、手術によりがんを切除したり人工肛門を作ることがあります。

また、大腸がんでは転移部を切除すれば治療の可能性があるので、複数回に分けて手術を

行ったり薬物（十放射線治療が効いて癌が縮小したら手術することもあります。このような選択肢を頭において、患者さんの心肺機能や病歴、生活状況ご希望などを勘案して治療を計画しています。

社会福祉法人
恩賜財団 済生会今治病院

今治市喜田村7丁目1番6号 <https://www.imabari.saiseikai.or.jp/>

☎0898-47-2500

